

伊藤壽介教授退官によせて



退官にあたって

顎顔面放射線学分野教授 伊藤 壽介

1961年新潟大学医学部を卒業、横須賀米国海軍病院における1年間のインターンの後、新潟大学医学部外科学教室に入局した。学生時代に脳神経外科の各論の講義を聴き、大変興味を覚え、将来は脳神経外科を専攻しようと学生時代に決めていた。しかしまだ独立した脳神経外科の教室はなく、脳外科専攻の植木幸明教授は第2外科の教授で、第1外科、第2外科を合わせて医局はひとつであった。1年間是一般外科も勉強できた。入局の翌年脳神経外科教室が創設された。日本における脳神経外科の勃興期でもあった。研究室の壁のペンキ塗りなど物理的にも教室の整備に参加した。開頭術には全麻がよいか、局麻がよいかなどが学会のシンポジウムのテーマになったような時代であった。脳神経外科では術前の局所診断の正確さが強調されていた。当時、エックス線検査は補助診断法と総称されていたが、まもなく、局所診断、質的診断の補助的手段ではなく主診断法であることに気づいた。ちょうど脳血管造影がルーチンの検査法に取り入れられ始めたころで、血管造影およびその読影に四苦八苦することとなった。1964年に出たJ. Taveras 著 “Diagnostic Neuroradiology” に遭遇し画像診断に熱中することとなった。当時は現在と異なり、脳を画像で直接みることができなかつた訳であるが、脳血管の走行から脳の構築を読み取ろうとする脳血管の読影法が取り入れられ、その詳細な research が始まった。

New York の The Mount Sinai Hospital の Radiology の Dr. Huang はこの道の第一人者であったが彼のもとに留学できたことはまことに幸運なことであった。血管造影の基礎となる脳血管の radiological anatomy の research を共にすることができたのみでなくかれの警咳に親しく接することができたことは大きな収穫であった。帰国早々、主に全国の脳神経外科医、放射線科医を対象にした神経放射線研修会が夏休み期間に3年連続で開催され、講師に招かれた。この折の講師達が分担執筆をし、本邦最初の神経放射線学の教科書ができた。

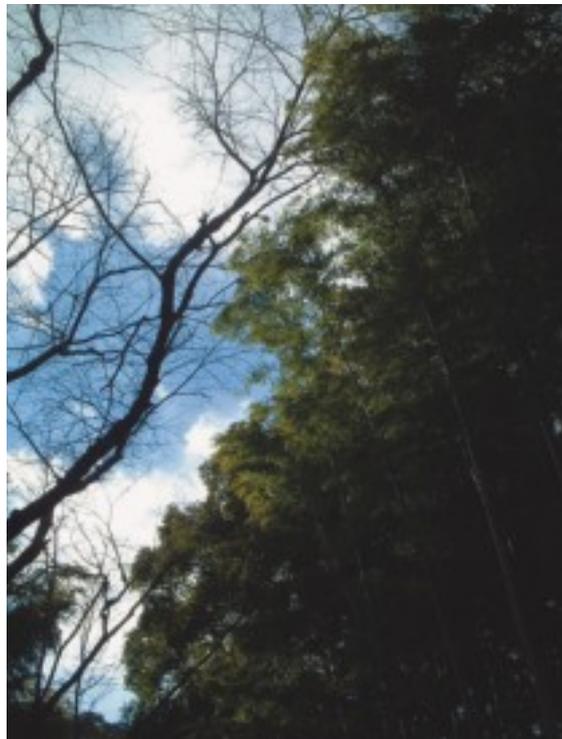
1980年歯科放射線学講座が開設され、初代の教授に就任した。歯科領域に画像診断を定着させることと、後継者を育てつつ、歯科領域の画像診断の research を行うことを目指した。就任まもなく歯学部附属病院にCTが導入された。日本の歯学部附属病院にCTが導入された嚆矢であった。全身用のCTを購入した。歯学部附属病院には頭部CTで十分ではないかとの議論もあったが、以後各大学にも全身用CTが導入されることとなった。まもなく、MRIも実用化され、超音波画像も含め、歯科領域の画像診断も長足な進歩をとげた。こう書き記してみると、つねに新しい分野の勃興期に遭遇してきたことになる。これは意図してできることではなく、非常な幸運に恵まれたものと思う。苦労ももちろん多かったが喜びもまた

大きかった。

定年になったら、いままでとまったく異なる世界で生きることが私の望みであった。しかし、諸般の事情で医療とまったく手をきることができないこととなった。初期の望みも全うすべく、新しい事業をはじめることとした。いままでとまったく異なる分野のことなので今後5年間基礎的な勉強と少しずつ事業をはじめるとの予定である。その後の5年間で事業を軌道にのせ、同調者を募り、かつ後継者を育て、75歳でこの分野からも完全に引退

する予定である。うまくゆかず挫折する可能性が非常に高いが、うまくゆけば世の中に利する事業であり、流行の言葉を使えば global にも役立つ仕事なのでなんとか頑張って成功させたいと念願している。挫折してもことの顛末は5年後に本誌に報告する予定である。

今日まで楽しく過ごせたのはひとえに私の我儘を許して下さった皆様方のご好意によるものと心から感謝いたします。長い間本当にありがとうございました。



ご退官にあたり深謝申し上げます

歯学部長 花 田 晃 治

平成14年3月31日をもって、伊藤壽介教授がご退官されるにあたり、長年の新潟大学歯学部および大学院研究科へのご貢献に対して感謝申し上げますとともに、お礼申し上げます。

伊藤先生は、昭和55年8月、新潟大学歯学部歯科放射線学講座が開設されたのを機会に、新潟大学医学部附属病院助教授から歯学部教授に就任されました。歯学部において、医学部ご出身の伊藤先生が就任されたことは画期的なことでありました。といいますのは、先生が歯学部に着任される前のご専門の一つは脳神経外科でした。そのため、伊藤先生は神経放射線学の分野での連続立体撮影における実用化の成功を経て、患者さんに与えられていた苦痛の軽減と術前の部位診断に貢献されました。さらには研究面では脳血管の詳細精密な画像解剖学の確立に貢献されました。エックス線コンピュータ断層撮影、磁気共鳴画像の出現後は、これらの新手法の臨床応用の定着にも貢献されました。

こうした背景から得られたご経験、業績、実績をもとにして歯学部および歯学部附属病院における教育、研究、臨床に長年にわたり携わってこられました。ともすればデンタルエックス線写真の領域での教育、研究、臨床に陥りがちな歯学部であって、伊藤先生は頭蓋顎顔面領域での教育、研究、臨床という視点を歯学部および歯学部附属病院に定着していただきました。多くの大学院生がご指導を受け、実効性のある優れた研究成果が発表されておりますし、多くの外国からの留学生の指導にも当たられました。また、これまでの経験を生かされまして、非常に多くの医学部生、研修医をはじめとする卒後教育にも貢献されました。

私が歯学部附属病院長の頃だったと思いますが、歯学部に着任されたばかりの伊藤先生は、歯学部附属病院における検査機器の不備を嘆いておられ、特に、当時エックス線コンピュータ断層撮影装置CTは医学部附属病院に設置されているのみで、歯学部に移られたので、今までのように

自由に使うことができないということでした。そこで歯学部附属病院からもCTを要求することになりましたが、全身用は医学部附属病院に設置すべきもので、歯学附属病院は頭部のみのもので十分であるうが、それも非常に難しい、とのことでした。それでもようやくにして全身用CTが設置されましたが、それはまさに伊藤先生がいらっしゃったからこそでありました。伊藤先生が医学部出身で医学部附属病院放射線助教授まで務めておられた業績および実績、さらに伊藤先生をキーマンとして医学部附属病院との共同利用による有効利用が計れると思われること、がその理由でした。こうして医学部附属病院3階から、歯学部食堂、歯学部附属病院病室を経てCT室に至るCT街道の開通をみるところとなりました。こうした機器利用を通して多くの業績が発表され続けられ、日本におけるこの道での先駆的役割を果たしてこられたことはいうまでもありません。

個人的なお礼と思い出で恐縮ですが、伊藤先生はまだ、医学部にいらっしゃった頃、小金町宿舎でご一緒でした。伊藤先生の出勤時間は、私が遅いというよりは、伊藤先生の方が早かったです。最近よりは、はるかに多い雪の朝、伊東先生がまず先頭で“轍わだち”を付けて出てゆかれたのを、窓から見届けてから出発する毎日でした。そのころから、まじめな、熱心な先生であると感じ入っておりましたが、くしくも歯学部においてご一緒するようになってからもそのとおりの先生でした。

長い間のご貢献に衷心よりお礼申し上げますとともに、ご健康をお祈り申し上げます。極めて困難な状況のなかにある歯学部および大学院医歯学総合研究科に対して、今後ともにご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

日本百名山完全登頂はいつでしょうか、フルマラソン完走による記録樹立はいつでしょうか、ピアニリサイタルはいつでしょうか、お話をお聞きできる日を楽しみにしています。

伊藤壽介教授退官に寄せて

附属病院長 河野正司

伊藤先生、長い間新潟大学のためにお働き下さいましてありがとうございました。

伊藤先生には昭和55年に歯学部の新設されました歯科放射線学講座の教授として新潟大学医学部より着任されました。また同時に、歯学部附属病院の歯科放射線科の科長として以来21年8ヶ月という長い間、病院のため患者さんのために先頭に立ってお働き下さいました。

この間、1984年にはCT撮影装置を他大学歯学部にも先駆けて導入され、また1997年には最新のアルゴリズムに基づくヘリカルCT撮影装置と常に時代の最先端の撮影装置の導入をはかられ、歯学部附属病院の患者さんのみならず医学部附属病院の患者さんの検査にも積極的に推進されて来られました。

現在の社会はどの分野においても改革が求められており、独立行政法人化する国立大学の中で、われわれ歯学部附属病院も存在意義を国民に示すことが出来なくてはなりません。この様な中で大学附属病院は高度先進医療の推進、施設の有効活用や経営の効率化という面から、歯学部、医学部の両附属病院の統合という wave が押し寄せてきています。

医学部ご出身の伊藤先生には、これから始まる両附属病院の統合問題でご活躍していただきたかったところでございますが、本年3月末日に大学の決まりによりまして御定年により御退官される

ことは、後に残ります歯学部附属病院にとりまして大変に残念なことで御座います。

先生は規則正しく計画的に、日常生活を律するプログラムを構築され、それを実行されていらっしゃるご様子を、毎年の年賀状でご報告なさっていらっしやいます。

昨年にはスポーツの部門として、橿形山脈、黒部五郎岳、五頭山、角田山への登山。ジョギングは26回183 km、10 km マラソンを3回、さらにプールに41回通われ、水泳もマスターされたご様子。その他にも家庭菜園ではきゅうり、なす、トマトを作り楽しまれていらっしやいます。

しかし、日頃のお仕事のお忙しさからか、以前にされていらっしやったピアノの練習、探鳥などを、昨年には休まれていらっしやるご様子で残念なことで御座います。4月から幾分でも時間的ゆとりがおできになりまたら、再開されることであろうと拝察申し上げております。

歯学部附属病院では改革の実行が求められているこの時期に、頭脳明晰・弁舌さわやかな先生を御定年でお送りしなくてはならないことは誠に残念であります。大学の定め御退官ではありますが、先生には今後とも歯学部附属病院そして歯学界の将来のために、英知をお貸しいただけますように。そしてますますご健勝にて、一層のご指導ご鞭撻をお願いしてやみません。

伊藤壽介教授の御退官に寄せて：随想

顎顔面放射線学分野 林 孝 文

新潟大学医歯学総合研究科教授 伊藤寿介先生は、本年3月末日をもって、停年退官を迎えられました。伊藤先生は、1980年（昭和55年）より21年余りの期間にわたり、新潟大学歯学部歯科放射線学講座（現在の大学院医歯学総合研究科・顎顔面放射線学分野）の教授として在籍され、教育・研究・臨床にと、国内はもとより海外においても、医科・歯科を問わず幅広い学術的活動をされて来られました。

伊藤先生は1961年（昭和36年）に新潟大学医学部をご卒業になり、翌年に横須賀米国海軍病院にて医学実地修練を修了されたのち、新潟大学大学院医学研究科・脳神経外科に入学されました。1966年（昭和41年）に大学院修了後、脳研究所の助手として脳神経外科に入局され、1968年（昭和43年）には脳神経外科の助手となられ、1971年（昭和46年）には医学部附属病院放射線科に移られました。1972年（昭和47年）の約1年間の米国留学の後、1974年（昭和49年）には講師、1976年（昭和51年）に助教授に昇任され、1980年（昭和55年）に歯学部の教授にご就任されました。

私のような若輩の徒が伊藤先生について語るのもおこがましい限りとは存じますが、同じ医局で15年間を過ごした身として、有り余る輝かしいご業績のご紹介は別の機会に譲ることとし、伊藤先生の人となりについて、先生から託された幾つかの言葉や漏れ伝え聞く逸話を頼りに、つれづれなるままに、私の知る限りのお姿のありのままを述べようと思います。

歯学部に来られる直前の頃の伊藤先生のご様子を耳にすることがありますが、伊藤先生は何事につけ非常に厳しい方であったという評判がもっぱらです。同時期に伊藤先生に関わられた先生方に伺いますと、とても怖い先生であったともいわれています。あるとき、症例のカンファレンスの場において、担当医が数分遅刻したことがあり、そ

の際伊藤先生はカンファレンスを中止させたとも伝えられています。最近の数年間に入局した若手の医局員たちには、とても想像がつかないようですが。

「訓導して厳ならざるは師の情（おこた）りなり」…他人に対して厳しくする以上、自分に対してはなおのこと厳しくしなければならない、というお気持ちからでしょうか、ご自身の精神・肉体ともに非常な負荷をかけ、端から見るとストイックな苦行僧を思わせる痛々しいまでの日常がありました。英語教師を招いて医局で英会話教室を開催した時期がありましたが、自身をワーカホリックと紹介されていたのが記憶に新しいところです。当時歯学部いらした方ならば誰もがご存じの通り、朝は7時前に大学に到着し（黒塗りのクラウンで登場される）、夜は毎晩のごとく長時間立ちっぱなしの症例検討会（歯科放射線学講座の検討会室で行われていました）が終わって、帰宅するのは午前2時といった調子で、土日も趣味の山歩き以外はたいてい出勤されるという、歯学部で最も長い時間大学においでになる先生のお一人であったと思われまふ。そのような極限の勤務状態にも関わらず、伊藤先生の「<疲れる>とはどんなことか僕には全くわからないねえ」というお声が耳から離れません。しかしこれが半分は本心で半分は強がりであろうことは私ども下々の者は想像していましたが、いよいよ新潟で歯科放射線学会総会を開催した折りに、さすがに最終日には「疲れたねえ」と思わず漏らされたその一言を、私どもが聞き逃すはずがありませんでした。

また、伊藤先生の逸話として一部で有名なのが、強力な「雨男」、というよりも「雪男」(?)という噂です。スキー旅行で伊藤先生が遅れて到着されるような場合、決まってそれまでの晴天はどこへやら、一転猛吹雪に見舞われることがしばしばでありました。天候の変化をじっくり観察してい

ると、今現在、伊藤先生がどこまで近づいてきておられるか推定することが可能とまで言われていました。極めつけは、伊藤先生が主幹となられて新潟で開催した神経放射線学会でした。そもそも2月という新潟としては非常に気候的に悪条件ではあるでしょうが、こともあろうに学会の当日は何十年ぶりかという大雪となり、交通機関はマヒするやら特別講演の講師は到着困難となるやら、「雪男」の決定的な証拠を入手したのでした。

伊藤先生は画像診断がご専門でしたが、雑談ではことあるごとに、「僕は誤診が多くてね」などと述べられていました。当然これを真に受ける者などおらず、ちょっと聞いただけでは単に伊藤先生一流の謙遜と受け取ってしまうところですが、さらに一步その意味を深く推察すると、様々な情報に惑わされず画像オリエンテッドに忠実に、ありのままに素直に読影するという、一見易しそうではあるも非常に高度な精神的修練が要求される作業を繰り返され、その合理的解釈の結果として得られた診断が、必ずしも複雑かつ多様な現実とは相容れないこともままあり得る、というレベルの話だということに注意しなければならないという点に突き当たります。読影とはことほどかように、奥が深いものなのだと言われ浅学の者として身にしみ一節であります。折りにつけ、自身の好きなことをやり続けることができ、たまたま結果としてそれが誰かを助けるような役に立つ可能性もあるわけであり、こうした（医療関係の）仕事は悪くはないというようなことをおっしゃられることがありました。伊藤先生の基本的な態度は合理的精神であり、どこか人間社会に対して醒めていかるようなドライな面をお持ちの一方で、あたかも無邪気な子供のように熱い好奇心を持ってこの世

界の事象に対峙する精神の持ち主でもありました。

伊藤先生の持論として、与えられた課題だけを黙々とこなす「お勉強」はもう卒業しましょう、という一節があります。新潟大学広報誌 Campus Forum 第143号には、伊藤先生が退官にあたってと題し寄稿された文が収載されていますが、そこには「最も肝心な点は、学生の学習意欲・態度であり、学習の動機付けの重要さが強調されたりするが、大学に入ってからでは遅すぎるのではないか。肝心なのは学習の動機付けではなく、中学・高校時代に人生への動機付けを自ら考えさせる機会を多く与えることだと思う」と述べられています。

振り返るに、伊藤先生が私ども医局の者に与えてくださったのは、「責任ある自由」ではなかったかと推察します。単なる放縦な自由とは相容れない、自身の力で切り拓いて行かなければその意義を全うできない、実に厳しいものではなかったかと思えます。まるで求道者を思わせるそのお言葉のひとつひとつを噛みしめるに、実に含みの多い示唆に富んだものであったと思えます。実際、放任と感じてこれが束縛のない快適生活であったり、あるいは逆にもっと手取り足取りの面倒を見て欲しいと感じたりと在職した者たちは様々な感想を持っていたと思えますが、この環境の真の意義を全うすることは、実は非常に困難を極めるものではなかったかと振り返ってしみじみと感じます。現在の私どもがあるのは、伊藤先生のような達観された先導者があればこそと思ひ、後学の徒として、感謝の念に堪えません。伊藤先生、本当にありがとうございました。そしてご退官おめでとうございます。

伊藤壽介教授最終講義について

最終講義は、2002（平成14）年3月7日午後5時から、歯学部講堂にて行われました。「私が歩んできた道」と題され、伊藤教授の生い立ちから進学に至る過程、医学部での勉学や卒業後の医学実地修練、脳神経外科学に進んだ後の神経放射線学との邂逅、歯学部における明確なフィロソフィーを持った教育、というご経歴が、さまざまな興味深いエピソードや社会背景などを絡めつつ、見応えのある一編の映画のごとく収斂し、感銘を与える講演でした。特に、世界的な業績を数多くお持ちでありつつも、飽くまで謙虚な態度で研究に臨まれるお姿は、後学の徒は誰もが襟を正す思いを

味わった事と思います。最後に本居宣長の「うひ山ぶみ」より「不才なる人といへども、おこたらず つとめだにすれば、それだけの功は有物也。又 晩学の人も、つとめはげめば、思の外 功をなすことあり。」を引用され、まだまだ今後もつとめはげまれることを述べられ、ますます頭が下がる思いがしました。

なお、最終講義における初の試みとして、組織再建口腔外科学分野の鈴木一郎先生のご協力のもと、講義の様子のweb中継をReal Systemにて行いました。 文責：林 孝文



伊藤壽介教授退官記念祝賀会について

伊藤壽介教授退官記念祝賀会について

退官記念祝賀会は、2002（平成14）年3月16日午後6時から、ホテルオークラ新潟4階末広の間にて行われました。当日は抜けるような晴天に恵まれ、暖かな一日でした。参加者は医局スタッフを含めて78名でした。まず、伊藤壽介教授ご夫妻を中心とした集合写真を撮影した後、ご夫妻が会場前にお並びになり、参加者ひとりひとりを会場にお迎えしました。

まず北海道大学大学院歯学研究科・歯科放射線学分野教授・中村太保先生より開式の挨拶を頂き、次に大学院医歯学総合研究科長・花田晃治先生、歯学部附属病院長・河野正司先生、日本歯科放射線学会理事長・東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科・口腔放射線医学分野教授・佐々木武仁先生より、心温まる祝辞を頂きました。そののち、北海道大学名誉教授・山崎岐男先生のご発声により乾杯に移り、祝宴が始まりました。

平周三先生による祝電披露ののち、引出物の紹介がなされました。引出物は文鎮型のルーペと、

伊藤教授がお作りになった医学英文用例集のデータを焼き込んだCD-Rとが全員に配られ、伊藤教授よりこれらの説明がなされました。

祝宴の後半に、液晶プロジェクタによるビデオ上映とスライド上映が行われました。ビデオは15年ほど前に作成された歯科放射線科紹介用のビデオで、当時のメンバーの若かりし姿を見ることが出来ました。スライドはパソコンによるプレゼンテーションで、1981年からの伊藤教授の足跡を写真で迎りました。小林富貴子先生と咬合制御学分野の若松孝典先生による漫才調の解説が爆笑を誘いました。

小山純市先生による記念品（18インチ液晶モニタ）の目録贈呈ののち、小林富貴子先生により教授ご夫妻に花束贈呈がなされました。

最後に、伊藤教授より謝辞がありましたが、その中で、10年計画の事業が初めて披露されました。しかしその実体はついに明らかにされませんでした。
文責：林 孝文

